天塩國中川郡美深町西方の地質予察

橋 本 亘*

(昭和27年4月9日受理)

A Geologic Reconnaissance of the Region West to Bifuka-machi, Nakagawa-gun, Teshio Province, Hokkaido.

By Wataru Hashimoto

This short article referred to the results of a short reconnaissance work in the above mentioned region. Formerly, agglomerate found in this region was considered to be distributed on the Tertiary formation unconformably. It was ascertained that the said agglomerate is interbedded in the Tertiary formation containing several lignite seams in its upper part and forms a large anticline elongated nearly longitudinally. It shows the present state of the progress of the geological survey in Hokkaido except the famous mineral lands that such a long anticline has never been found until today, though the area is very near to a well communicated fertile land in the northern central Hokkaido.

The sedimentary formation exposed in this region is subdivided into two parts; the Kawanishi formation, the upper, and the Urubeshi formation, the lower which in turn is subdivided into two members, those are, the Hutamatabashi Agglomerate and the Tamagawa Andesitic Sandstone in descending order. The Kawanishi formation mainly consists of sandstone and conglomerate and contains several lignite seams in its middle part.

There is no oil indication has been known yet in this region but a spring of mineral water with sulphide order is met with in the axial part of the anticline at the upper stream of the Byoho-no-sawa.

筆者はここ数年来、或はPEACの1/20万北海道地質図の編輯、或は北海道総合開発委員会の1/60万地質図の編輯に参加し、北海道の地質調査の現況は、極限られた地域、例えば炭田、油田、金属鉱山成は非金属鉱山周辺とかには精度の高い調査が行われているにも拘らず、一般には概査すら行われていない処の多い事を感じて来た。そこで本篇のような誠に貧弱な予察報告でも何かの御役に立つ事を願つて、敢えて発表する次第であります。

* 橋本地質調査所所長

小文に述べんとする処は、従来第三紀層の上にある若い集塊岩と考えられて来たものが、実は挟炭層と共に1背斜を成すもので、然もその背斜は相当長く続くものらしい事と、その地層がここの西方に当る朱陶内方面で、滝川層或は稚内硬頁岩層に対比されて来た地層に近似である事と、この様な事が比較的交通の便利な処にあり乍ら今まで気付かれずにあつたと云う点である。

美深町*は宗谷本線で旭川市の北方約75軒の名寄町を中心とする天塩川凹地帯¹⁾の中にあつて、名寄町との間には丘陵地があつてこの凹地帯を南北に分けている。名寄町からは北方20数軒に当り夏季はバスも通じている。

附近の地質は岡村要藏²⁾が天塩川はその支流のウルベシ川に沿つて予察旅行をしてゐるに過ぎない。

小文に記してある処は、埋蔵炭量調査の際の概査**にその後の資料を加えたものでその地域は美深町の西に当り、天塩川本流とその支流ウルベシ川とに挟まれる南北に長い山地を、北はウルベシ川の横谷となつてゐる処から南は智恵文村の北部に至る間である。

山地の大部分は道有林で、内に2本の横断林内歩道とその北のものから北に向う縦走歩道の他に小さなものが若干あつて、天塩川沿い道路とウルベシ川沿いの道を結んでいる。

分水嶺は山地の西に偏し、北方で250m、南方で500m程の高さで南北に連る。これと相對峙して東側にも同じように平均350mの山頂の嶺が南北に連るのだが、この方は横谷に切られている。ウルベシ川は下流で横谷を作つて山地の構造を良く示している。

分水嶺の西はウルベシ川の中流部に向つて僅かにホツケバツグ地形を示すのみで、大体平均した傾斜を示す。その傾斜は北方程急で南下する程緩くなつていて、この部分を構成する地層の傾斜を反映している。

分水嶺に対峙する東の嶺の東側には何処かの平坦面が見られ、その内、下の3段は明かに礫層を頂く。

1/5万の地形図には、北海道の他の場所でも良く見られるような沢の形の誤りがある。特に美深炭坑の沢から苗圃の沢に至る間に甚しい。

この山地を構成する地層は次の如く分類される。即ち、

* ビウカと云われていたが最近ではビフカと云うようである。

** 橋本且・為口和巳：1952. 天塩ウルベシ川上流区域地質調査結果報告書、札幌道庁石炭部開発課藏。

北海道天塩国中川郡美深町西方山地地質予察図

本域内に発達する第三系は、その構造が大きな1つの背斜をする為の下底を露出していない。

見られる限りの最下部は安山岩質の砂岩を主とする地層で、時には礫質であり、時には Volglomerate²⁾ 式の安山岩礫を有し、しばしば炭化した木片、木株等を恰も流木として沈積させたかのような産状において含有する。最も良い露出はウルベシ川が横谷を作り東流する部分の西側で、玉川部落の墓地の沢合流点附近に見られる他には分水嶺とこれに対峙する東の嶺との間の部分に見られ、丁度この山地の中央部に細長く南北に分布するのである。

この地層は安山岩質集塊岩に移化する。時にこの層には安山岩の熔岩と思われるものを見る事があり、苗圃の沢において明かである。標式地はウルベシ川の屈曲点、玉川部落の二股橋であつて、そこでは、他に比して厚さが薄くなつてゐるが、分水嶺の西側では南に行く程厚くなつてゐる。

先のを玉川安山岩質砂岩層と呼び、後のを二股橋安山岩質集塊岩層と名付け、この2者を一括してウルベシ層と呼ぶ。

ウルベシ層は集塊岩層の上につく若干の安山岩質砂岩部を過て、礫岩を主とする地層に整合的に移化する。その地層を河西層と名付ける。

河西層の下部はクルミ〜ポテト大の古生層岩石の礫を主とする礫岩で、流木の炭化又は硅化したものを稀に有する。

中部は軟質の砂岩を主とし頁岩を伴う地層で、時に細かい礫層もある。側方変化に富む地層で2尺内外の亜炭層を数枚介在する。それ等の内には隊行可能と見られるものもあり、外観は天北炭に似ており、風化するとビリビリに剥げ、木炭の如く燃える。発熱量は4,300〜4,800程である。上部は再び礫岩を主とした地層となり、著しい偽層を示す。

地層の厚さはもとより測定して見なかつたが、断面から察するにウルベシ層下部が400m+、上部の安山岩質集塊岩が100〜200m程で東南方ではもつと厚いように見受けられる。河西層は2,000m近くある様だ。

構造は非常に簡単で、玉川部落墓地の沢の東を通る背斜軸があつて北々西から南々東に向い、北は恩根内村に、南は智恵文村を過て名寄町市街地の西方に達するらしい事が、二股橋集塊岩層の作る地形から容易に推察される。筆者の見た処では明かに智恵文村まで追跡出来た。

一方ウルベシ川の西にはこの背斜軸の西に併走する向斜部が認められ、その南限は、ほぼウルベシ川の南端附近にあるらしいと予想される。その他東側にも亦併行する背斜が天塩川の下に存在するらしい事が、美深橋北々西約1軒の崖から察せられる。

本地域内において油徴は発見しなかつたが、鉱泉は苗圃の沢の上流、背斜軸部附近に見られた。そこでは鉄管が打込まれており、高さ1m半にも達しそうな処から硫化水素臭を発する水が溢れて、附近に湯華を沈殿させてゐる。

全層を通じて炭質物や不完全な木の葉石しか発見出来なかつたので、時代の判定に苦しむが、層序的に比較して見ると、当地の東北方に当る恩根内産炭地において鈴木達夫⁴⁾*が凝灰質砂岩層とした地層の中下部にも似てゐるし、又当地の西方に当る路の台方面で片山勝、田中啓策⁵⁾*が稚内頁岩層に対比されはしないかと考えた含亜炭層にも似てゐる。何れも集塊岩を下部に有する点は当地と共通であるが、両地ともに化石を産する。田上政敏⁶⁾はこれ等両地の地層を追分統（稚内硬質頁岩層を含めての

* 尾崎金石齋門：同炭田調査綱、PEAC札幌小委員會藏、正式報告書は地質調査所藏。

** 片山勝・田中啓策：1947、蔭の臺地區地質圖説明書、同上、正式のものは地質調査所藏。

意味での) のものと考えている。

路の台の南の朱鞠内においては、この含亜炭層は古丹別層の上に不整合に重るらしいと片山勝、田中啓策*は記し、鈴木達夫³⁾は油徴を有する下部新第三系を不整合に覆うと記す。油徴は片山、田中に依れば、築別層の含化石砂岩層中に見られ、白堊紀層に由来するものと見做されている。

一方、佐々保雄⁷⁾は雨竜川上流の朱鞠内、路の台の含亜炭層を滝川層に対比している。然し、恵比島南方において曾て移行されたような炭層が峠下層最下部にある事⁸⁾を考えると、寧ろ海棲介化石の検討が望ましい。

文 献

- 1) 福地信世：1906, 北海道の地体構造に関する一考察, 地学., XⅦ, pp. 843~848
- 2) 岡村要藏：1912, 北海道北部中央地域地質調査報文, 鉱調., Ⅱ, pp. 1~63.
岡村要藏：1912, 天塩川流域, 地学, XⅩⅣ, pp. 329~334, 482~489.
- 3) Alvir, A.D. 1929, A Geological Study of the Angat-Novaliches Region, Philp. Jour. Sci, XL, pp. 359~415.
- 4) 鈴木達夫：1922, 天塩國中川郡恩根内産炭地調査報文, 鉱調., 34, pp. 1~16.
- 5) 田上政敏：1940, 天北含炭層は新第三紀ならん, 地質., XLVII. pp. 188~208.
- 6) 鈴木達夫：1922, 石狩国雨竜郡朱鞠内産油地調査報文, 鉱調., 34, pp. 17~30.
- 7) 佐々保雄：1938, 北海道留萌雨竜炭田に於ける各含炭層の層位に就いて, 北石鉱報., 291, pp. 1~6.
- 8) 橋本亘：1949, 樺戸山地周縁部の地質一 I, 北地要報., 13, pp. 11~18.

* 片山勝・田中啓策：1947, 朱鞠内地区地質圖説明書, PEAC札幌小委員会蔵, 正式のものは地質調査所蔵。